

である」(428)。

さらに第三部では、エコロジー的危機の問題が扱われ、この問題に対するエンゲルス、マルクスの態度が考察される。エコロジー問題について気候学や人口統計学などによる自然科学的な決定論、逆にエコロジー問題を全面的に社会的問題として自然の規定性を無効にする立場、そのどちらでもない地点で問題を考えるべきことが説かれている。

以上、『時ならぬマルクス』の議論を概観した。紹介できなかった興味深い論点も多々ある。本書が書かれて二〇年ほどが経過し、いまやマルクスは「時ならぬ」どころか、「時勢に乗った」存在になっている。むしろ、だからといってベンサイドの考察が無駄になったわけではない。彼の示したマルクス読解の可能性、そのための多面にわたる詳細な考察は、現在においてもさまざまな示唆を与えるものである。

(未來社、2015年12月刊
A5判上製、6800円)

尾関周二著

多元的共生社会が未来を開く



龜山純生

(哲学・環境倫理)

1、本書の主な内容と展開

著者は、一貫してマルクス思想のコミュニケーション論的深化により独自の社会哲学を展開してきたことで知られる。そしてその一環として1990年代

初めから新領域の環境哲学を開拓し、同時に「共生」の社会哲学的意義を先駆的に追求してきた。本書は、その思想的・理論的エッセンスを新たに「多元的共生社会」像としてコンパクトにまとめ、一般読者に提示したものである。

まずは、四部からなる本書の主な内容と展開をザックリと見ておこう。

「I. 共生の思想と現代」では、まず「第1章〈共生〉を改めて考える」で共生論

の多様性を踏まえて「多元的共生社会」理念を提起する。「第2章『共生』理解の深化」では、人間―自然関係・人間―人間関係の両面で現代欧米思想の論争を紹介して、この両面を媒介する共生理念の脱近代の意義を理論的に整理する。

それを受けて「II. 共生理念と〈農〉の思想」では、「第3章 共生理念と人間―自然関係のとらえ方」で、人間と自然のコミュニケーション関係とマルクス以来の人間と自然の「物質代謝」⇨労働論を両核として〈農〉の文明論的意義が確認される。そして、〈農〉が人間自然共生と人間共生の結節点として共生社会の理念的核心であることが、安藤昌益を通して照射される。その観点から「第4章 〈農〉と現代社会」では、近代文明と工業的農業が環境と文化・コミュニティを破壊し、その極致のTPPが「食システム」自体も危機に陥らせる現状を批判する。そこから、「持続可能な〈農〉」と共生社会の近代文明転換の意義が示される。

このことを人類史の中に位置づける状

大な試みが「III. 人類史・世界史の新たな視座の探求と共生概念の意義」である。

ここでは、環境史や人類学・歴史学等の新しい成果に基づき、「第5章『人間と自然の物質代謝』の様式」で農業以前の人類の自然との関係を確認し、「第6章 第1の人類史的転換―1万年前の『農業革命』と文明社会へ」、「第7章 第2の人類史的転換―近代文明社会へ」と展開される。これを受けて、第3の人類史的転換として「IV. 近代文明の危機と共生社会へ向けて」が置かれる。ここでは「第8章 3・11原発大震災が暴露した近代文明の問題性」が改めて確認され、それを克服する方向が「第9章 多元的共生社会と新たな文明へ向けて」で本書全体の結論として述べられる。

ここに示されるように、本書の特徴と意義は何よりも、閉塞の現代社会の転換の道筋を脱近代の共生社会として明確化したこと、特に〈農〉を基軸に置く将来社会像を初めて提起した点にある。

2、共生社会の現実的な〈国民的理性〉化の展望

まず注目されるのは、多様な共生論を包括的に位置づけ、それが胚胎する多様な国民の願いを結びつける枠組みを〈プロセスとしての多元的共生社会〉として提示した点にある。そして、その実現の戦略的道筋を明示し、これを現代社会の根本的転換の社会理念として広く市民・国民に連帯的共有化を呼びかける実践性にある。

共生（社会）の語は、日本の〈近代化達成〉⇨グローバル資本主義化の中で登場し、90年代に急速にかつ圧倒的に市民・国民に定着した。それは、激しい国際対立、競争社会の敵対的關係や異質性排除の画一性の克服を含意して、個人相互の關係から、男女や対弱者・対外国人などの社会的關係、異文化・民族・国家間の關係まで、また人間と自然・動物の關係にも、幅広い次元で多様に語られている。識者・言論人ははじめ様々な社会的活動家・

教育者・宗教者まで、論者の立場も共生の意味も注目点も多様である。共生の注目点も、態度（マナー）レベルから制度・政策レベル、社会構造レベルまで、さらには生物の共生や〈死者との共生〉にも及ぶなど、氾濫気味ともいえる状況にある。それゆえ共生（社会）論は曖昧で情緒に流れ、時には対立をはらみ、社会理念としては疑問視されたり、現実隠蔽の美麗句との批判も寄せられた。それ故に、また、現実の対立関係の根深さから〈共生〉よりも〈共存〉を優先する議論なども惹起している。

だがこのような共生論の多様性は何よりも、それほど多様な局面で市民・国民が現代の画一化（排除と抑圧）と格差社会から転換を願う、それが共生（社会）の語に収斂していることを意味する。本書は何よりもそこに注目し、この願いに深く定位し、この言わば国民的スローガンから社会変革の歩みを構想する。本書も指摘するが、政府も共生政策を言うことで変革理念を共生社会と掲げることが忌避

すべきでないのは、政府や新自由主義が自由を言うから自由の理念を放棄すべきでないのと同じである。むしろ政府等の欺瞞の暴露を通じて「真の共生社会」への道を国民的に共有するプロセスとなる。

この視点から本書は、共生論の多様性を共生社会理念の「包括性」としてとらえ、人間存在の多元性（自然存在、社会的存在、精神的存在など）や、前述の人間関係の重層性に応じた共生の多様な局面ないし側面と位置づける枠組みとして、「多元的共生社会」理念を提示する。そして、共生社会を敵対関係からの転換の「プロセス」として捉えることを新たに提起し、共存論を始め多様な共生論もそのプロセスに位置づけて多元的な共生的連帯の枠組みを用意した。

同時に共生論の拡散を防ぐ紐帯として、多様な共生論に共有される〈ミニマムの思想的質〉を人間関係に関わる「共生概念の構成要素」として取り出す（「必要条件」として①一方的同化・排除の否定と差

異の相互承認、②対立・抗争の承認と暴力的解決の否定、③実質的平等性とコミュニケーション関係の追求、④差異の中で自己実現と相互確認。「十分条件」として⑤共生の名に隠された「欺瞞」の暴露、⑥力関係の対等性の承認、⑦相互の個性・聖域の尊重と共通理解の拡大、⑧共生の相互協力から新たな共同の探求。「必要条件」は、多様な共生論が言わば明示的に共有する思想的質であり、「十分条件」は、多様な共生論が何らかの意味で現実化を目指す限り不可避的に共有される思想的質と言えよう。特に⑤によって共生社会論の空論化・虚偽化の歯止めとする。この〈ミニマム〉を起点に、多様な共生論の——直接には精神論や態度論の次元であつても——現代批判の意義を見て、さらにそれぞれの共生を実現するために社会的基盤の不可欠性を提起し、「共生社会」の構造的ポイントの共通確認へとiggさなう。そして2章以下の展開に即して、その意義をグローバル資本主義の現実批判との往復の中で確認しつつ、最終的に、〈農〉基軸の「多元的共生社会」へ

の人類史的転換を理念的に共有化するこ
とを展望する。

社会変革と将来社会像のこのような提
起の仕方は、かつての啓蒙主義的、ない
し「天下り」的な提起とは根本的に異な
り、国民共有の磁場から対話的共生的に
合意を目指す点で画期的と言えよう。

3、〈農〉の人間学的意義と社会変革 理念への位置づけ

本書の最大の眼目は、脱近代・脱資本
主義の多元的共生社会とそこへの転換の
プロセスの基軸に、〈農〉を位置づける点
にある。かつての社会主義理念も含め、
従来脱近代論や将来社会論、社会変革
論には全くなかった論点であり、その意
味でまさしく歴史の提起である。ちなみ
に〈農〉とは、単に農業だけでなく、広
く「生存のために自然に直接働きかけ、
生態系の循環に位置づけられる生産・生
活・文化様式」を含意し、その意味で農・
林・漁などの営みとその社会関係・ライ
フスタイルを射程に置いている。それは

現代の「工業化した農業」の対極にある。
紙幅の関係で、本書の白眉とも言うべ
き、多彩な論者を援用した説得的な〈農〉
の位置づけの展開を追う余裕はないが、
現代社会転換の視点から敢えて二点に注
目しておきたい。

第一は、コミュニケーション論の視点
からの初期マルクス労働論を基礎とし
て、人類史的視野で確認される〈農〉の
人間学的意味を明確にした点である。つ
まり、〈農〉は自然との関わりと人間関係
を媒介し、生命・社会生活・人生（意味）
を三契機に身体的存在としての人間の生
をトータルに実現する要である、と。

人類史的には農業が文化の源泉であ
り、生態系システムの中でそれと社会シ
ステムを媒介する文明を担保してきた。
だが近代の大工業・資本主義文明は、社
会システム肥大化で生態系システム破壊
を招いて人類存続を危うくし、諸個人は
自然との関わりから切断されて生きた身
体性と生の三契機を喪失して人間的存在
の危機に瀕している。近代化過程で徹底

的に〈農〉を解体し市場システム依存社
会を実現した現代日本では一層深刻であ
る。そこでの受苦、生の不安と〈人間の
危機〉、それ故の共生（社会）への多面
的願いは、改めて〈農〉の人間学的意味
の重要性を照射している。もとより本書
が注意するように、歴史的には抑圧関係
をも生んだ前近代の農業文明への回帰で
なく、科学技術・工業を発達させた人類
史的段階に応じた〈農〉の復権である。こ
う言うとき社会変革論的には、〈農〉が解体
され尽くした現代社会からは夢物語りと
言われるかもしれない。もちろん現実
モデル通りにはいかない。だが、市場シ
ステムへの生活全面依存ゆえに生身の人
間関係を忌避する〈孤人〉が今後社会の
中核となる中で、コミュニティ形成や生
身の身体性回復の原理的テコをどこに見
出しうるのか？本書が骨太く提起する
〈農〉の人間学的意義の社会的位置づけが
重要なゆえんである。

第二に、社会とは生身の人間の交わり
の範囲として本質的に身体的空間であ

り、どの次元の社会であっても土地性(大地性)を不可分の契機とする故に、〈農〉が社会システムの基礎に位置しなければならぬことである。

本書はこのような表現では強調しないが、将来社会のグローバル「多元的共生社会」の3ポイントがそれを意味すると思える。何よりも①近代の「世界システム」(グローバル資本主義)から、「ローカルな

自給的共同体」を基礎とするネットワーク型の「新しい世界システム」へ。これを踏まえて②「工業化社会から農工共生社会へ」、③「大都市中心社会から都市農村共生社会へ」。近代は、人間から生きた身体性を、社会から空間性(大地性)を排除してきた(その点で、社会を専ら人間関係システムと規定して身体性・空間性を単なる外部与件とみなしてきた哲学・社会科学も近代に呪縛されてきた)。資本主義(マネー資本主義)、工業化社会がそれを推進し、大都市中心社会もそれゆえ生じ、問題を深刻化した。現代の社会的力の弱体化(共同体解体・コミュニティ不在・公共圏と民主主義の形

骸化)の核心もそこにある。ここに、〈農〉を中核とする身体性・土地性と一体の自立的地域社会の根本的意義があり、それを基礎として多様な社会が各次元に応じた仕方で身体性・大地性を担保しつつネットワーク的に結合する多元的共生社会(そのマクロポイントが②③)の不可避性がある。

以上二つが交差する点から、本書が強調するように、現代日本において〈農〉は、「食料生産」の問題はもとより、「環境・安全・安心・生命・地域・コミュニティ・スピリチュアリティ」といった現代のキーワード」が示す人間と社会の全般的問題を解決する核心を照射すると言えよう。

4、多元的共生社会への転換へ、当面の戦略的政策ポイントの提示

本書は、将来のグローバル多元的共生社会への人類史的移行過程における国家の固有の役割を重視し、近代国民国家を超える「国際連帯国家」「環境福祉平和国家」を提起する。それは一方で、何よ

り近代の資本主義「世界システム」の破綻を示す人類学的課題とそのグローバル性から要請される(①核戦争の脅威、②環境危機、③食など生存手段の安全・安心の危機、④生存をめぐる各国内・各国間の深刻な格差、⑤人口問題)。他方では、この課題へのアプローチをめぐる各国の差異の現実と歴史性(特に近代化を巡る南北の相違)による。そして、日本こそが先駆的に、グローバル資本主義の制御を軸とする「国際連帯国家」、〈農〉の復権を軸とする「環境福祉平和国家」へと転換し、世界に貢献すべきと提起する。この人類学的課題に関してグローバル資本主義の下で、日本国内で切実さを増すとともに南北問題に深くコミットし、他方で解決への一定の条件と歴史的経験をもつ(特に①、②、⑤)からと言う。

それは日本社会の脱近代的転換Ⅱ多元的共生社会へのプロセスにおける近未来的将来社会像とも言える。それを展望して転換の第一歩を「資本主義システムか

らの「暫時的脱出」の4ポイントとして提起する①〈農〉の復権と地産地消・自給的共同体の形成、②「ディーセント・ワーク、ソーシャル・ビジネス、労働者協同組合の拡大」③「ベリック・インカム」の社会的確保、④自己確証的労働の拡大。

明らかかなようにこれは、グローバル資本主義貫徹の格差社会化の中で過酷労働と生活・生命の不安にあえぐ国民の切実な願いと直結し、その戦略的政策化は「福祉国家」路線と重なる。しかし、その基本を〈農〉の復権に置き、②③④が①を媒介にして提示される点で大きく異なる。③が国家の福祉費だけでなく半農半×生活を位置づけ、それをモデルに④（資本システム呪縛から離脱する生）の社会的実現を展望し、③④の基礎を①の環境保全型農業と結合した自給的共同体に集約し、それを核とした地域再生を射程に②の社会的実現を展望する。その点で、「福祉国家」路線を発展させる「環境福祉平和国家」への戦略的スタートポイントである。

と同時にそれは、今まさしく喫緊の国民的政治課題である新自由主義路線転換にとつても、極めて現実的な提示でもある。例えば、評者は国家論には素人だが、「福祉国家」に共感しつつも、福祉費の国家保障（富・所得の再配分）に還元する傾向には素朴な疑問を抱いてきた。第一

に、表層の問題だが、高齢化社会・不安社会化で福祉費の無限肥大化がイメージされている。それゆえ国家財政危機の中では、年金問題の世代間対立が象徴する

ように、福祉費確保への国民的合意は現実には困難なように思える。第二に、本質的問題として、福祉とは何より実体としての人間の生活であり、生活費保障・労働条件改善だけでは実現しない（特に、生活の全面的市場依存システム故の〈孤人〉においては、なおさらである）。コミュニティ、自然との生身の交流が不可欠だし、何より安全な食料の確保も含めて、実体的福祉の本質的な契機である。なら、産業政策・地域政策も含めて広く社会政策的に〈農〉の復権を保障する国家こそが福祉国

家でないか。そして〈農〉を基礎とする生活様式で実体的に福祉を実現する方向の中で、必要な福祉費の無限肥大化イメージも防げ、福祉国家への国民的合意も展望できるのでないか……。

その意味で、〈農〉の復権を核とするこの提起は、当面の緊急課題の解決への合意をテコとした、共生社会をめざす多様な運動の多元的連帯のプロセスの〈凝集核〉の提示とも言えよう。

5、多元的共生社会の人類史的位置づけの思想的・理論的意義

多元的共生社会を人類史の中に明確に位置づけたことも、多様な共生論の中で際立つ本書の特徴である。それは実践的には、読者にとつて、身近な生活場面から願われる多様な共生の多元的実現を社会構造的地盤の次元で共有することをマクロ視野で、人類史的意味として確認する意義をもつ。さらにそれにより、日本社会から発する共生社会理念が、グローバルレベルでも、各国・各文化の多元性

を担保しつつ連带的に共有される〈普遍性〉を確認する意義をもつ。と同時に、思想的・理論的にも重要な問題を提起している。

第一に、〈農〉の人間学的意義・社会哲学的意義の初の本格的説明、哲学界での農の哲学の開拓である。本書も言うが、これまで、現代哲学だけでなく驚くべきことに哲学史においても農が哲学の主題とされなかった。それは歴史的に、哲学が都市で成立展開した故に都市目線に呪縛されてきたことを示している。その意味で、本書は哲学の根本的パラダイム転換を提起した。その点で、前近代の安藤昌益を「農の哲学」と位置づけた意義は大きく、評者の関心から言えば、日本哲学史の端緒を開く点でも重要である。哲学界では日本の哲学は明治期の Philosophy 導入以後とされ、前近代では日本精神史はあっても日本哲学史不在だったことに、疑問をもってきたからである。

同時に交換関係史観、環境史観と相互媒介させる新しい歴史解釈枠組み・方法論を提起する。それは著者長年のコミュニケーション論的なマルクス解釈の帰結であるとともに、環境哲学の成果、自然との共生と人間共生を媒介させる共生理念の社会哲学的探求から開かれたものと言える。史的唯物論のこの深化により、イデオロギーに還元されない国家の自立性や「世界システム」論を哲学的に基礎づけ、進歩史観でない新しい世界史を開いている。それは、多元的共生社会のプロジェクトにおける「新しい世界システム」や「環境福祉国家」の根拠をなしている。

第三に、共同体解体を経て自立的個人のアソシエーションへという、マルクス主義も含む戦後日本思想の進歩史観フレームを修正する。本書はリベラリズムとコミュニティアニズムの論争を介して、改めてアソシエーションの基礎に共同体を位置づけ、相互媒介関係を見ることを提起し、〈農〉の自給的共同体を基礎づける。これにより、〈農〉の人間学意義が照射する、人間存在の根本条件としての共同体を位置づける。

第四に、圧巻は、史的唯物論的人類史に新しい「精神史」を位置づけ、思想史の新しい視点を拓くことである。特に、生活者の日常の「深層の精神・心性」に焦点を当てそこに人類史的経験の「蓄積」を見る視点から、それとの絡み合いを射程に、社会の変化に応じて出現する体系的思想の歴史を位置づける。これにより共生の「精神」の淵源を、人類登場過程における「狩られる人」から「狩る人」への転換経験の、「意識のビッグバン」を介した定着（強者と弱者の両義的心性）に見出し、農耕文明以前の生活形態の「共同性・平等主義」を「深層」の生活思想の起点と位置づける。そして以後の体系的思想史を平等主義（人類史回復？）の歴史的展開を基軸に、従来哲学史が進歩主義的に注目した諸思想（自由など）を位置づける枠組みを提示する。これにより、先述した現代の多様な共生思想のミニマムの核心が「実質的平等」にあることを照

射する。これらは、基本的に思想を上部構造・イデオロギー（観念形態・虚構）と見る通説的史的唯物論が全く位置づけなかった視点である。実践的にもこのことによって、現代人の共生理念への共感の生活「精神」の根深さと〈歴史の普遍性〉を位置づけ、多元的共生社会理念へのさらなる共感の広がりを展望する。まことに本書の最後を飾るにふさわしい提起である。

これらは本書の性格上、なお見取り図的提示であり、そこにはさらに検討すべき問題も多い（「深層の精神」の唯物論的位置づけ、共同性の内実など）。だがそれは、今後の共同課題である。

以上のように本書は、日本と世界の脱近代的転換にとって実践的にも理論的にも、新鮮で極めて重要な提起をしている。社会変革を願う全ての人々、思想家・理論家に、正面からの検討を期待するとともに、相互批判の中での理論的実践的な一層の豊富化が望まれることである。

（農林統計出版、2015年10月刊
A5判 並製 2000円）

本欄は本体価格で表示しています。